



瓶下起之巻

三編端

13
2853



八13
2853



下葉

如久
如久

三編
探

三〇

とほとどら何もしも次語をたの申しさきんをいり
たぐのち中よりもしも次語をたの申しさきんをいり
らづち十の業花の若もさえての後の花も一時はさ

春乃夏蝶此一眠

作去ふ

ほつせん

家小年久しと松と常盤の久松所ほつせん徳玉も廣く古悪る物
本結れを高く高のふ大商人あり名は松松を昔高とて代く流し居
亦あり未婦は申すまじく下と悪婦はくふも但せし身なれ
どもゆり花葉さるふあはるまも早の五の六の妻も三十一は三つに
女も子といふものなく任せ兼さるむの中さとかくゆり小成りゆ
金銀とる室の急角所ささるものめをむけら彼吾妻傳が地面
の内小あ玉道を浪人めて人平も候しうぬ若き主婦もあふ若
氣のあふあてあえとつちぬ形めて二人はれ當もなると迷む
事と少しは知らばと傳りに彼浪人の妻と琴此所通として一
月立二日五月日もあふ波女房とあるぬ身あを月とらて
あふ知るる男まか生しなる不被浪人も未だあふ五六とては矣

色の生れを致お細が黄く一可き下し記に死ぬ狂連を何とを是を
題おし我は致を致お細を女房中せんとん小名い振付けばこそ名を
惣三郎の縁照する致とふんて是をよけ狂母の遺をよては家の血
脈小あふぬとぞ知りて何れとぞけおと昔は弟小僕りてゆりなむ
まふお細小まけるく身い一向小物もまごお振る致お細小の飛んま
一まふにお三郎とま号とつてお入おまんとお彼おりの氣をるぬ
て原切小まを致惣三郎もん小保くのをまそらまごも我はお小
る不ぬもなき小るま中徳を結びて記に狂んよりつれるくして我
小忠おをつりして何とぞ告三郎と夫婦に成る父もお徳昔は弟も
一とつとんと忠おのを多知小邪名小まれどもお細は少くも恨ま
伯父の手つけのおりの邪兄やうゆまを陰小成日向小成り惣三郎と大
切小まを致惣三郎の父とぞ思くまごも人も小笑させて首尾よりく

家と様見とつて致は狂いあふ狂狂酒を若女弟を買て内小とて
斤射も振む今日を若原あすの深川と狂く夕末を酒をさし成て
今お家内の忠もあまされておまらふとつて人申り之誰を人笑んま
人もるくまもも若て妻に成り致お細の親里に何とぞまご二月にハ
婚れをまさんと狂くとま急が小かんまんの惣三郎を狂くおまもいとが
お細を人との面早くお親里に陰小成日向小成惣三郎の横邊を若
いともまごくまをれども惣三郎の構ひ身をまよけつて昔三郎の目には
み小惚れて身の中一人るま時かまとなくんの大を志りくとま
せ目であつてもお細は一筋小惣三郎と大切小していつ小も昔三郎と
たりまらわくまごもまもたなくつてまごも若らおるま今りお正月二日
まごも若らるる父の怒り小をまごも自始よあつとまごのおりま
お小上下を身てやりおれら惣三郎も忠告のまごも整て振るお細は

諸侯の御子種を扱メの下えりかそ朱子の帝とメて想て
は其日のと共や登させそ兵^た美良那さんよ一ツお下めとを申せ
ん^らの^らい^らや^らま^らり^らを^らお^らま^らり^らと^らお^ら風^らび^らた^らま^ら
て^らの^らお^らん^らの^ら風^らを^ら引^らぶ^らの^らめ^らい^らぶ^らら^らお^らせ^らる^らと^らお^らん^らる^ら候^らは^ら
を^ら垢^ら二^らつ^らお^らど^らも^らあ^らま^らせ^らい^らだ^らよ^らと^らい^らふ^らら^らせ^らあ^らつ^らり^らあ^らる^ら
せ^らて^らあ^らる^ら面^ら倒^らと^らえ^らる^らら^らら^らと^ら引^らた^らり^ら自^らら^らま^ら人^ら急^ら登^らを^ら取^ら
お^ら能^らを^らあ^らる^らと^らい^らて^ら「^らほ^ら中^ら也^ら」^らお^ら能^らを^らお^ら扱^らて^ら長^らら^らの^らお^ら上^らも^らを^ら
上^らて^らそ^らり^らや^らあ^らる^らと^らお^ら上^らを^らせ^らと^らも^らい^らつ^らを^らお^らん^らら^らお^らむ^らく^らお^ら上^らを^ら
く^ら引^らて^ら遊^ら舟^らの^ら嬉^られ^らを^らす^らの^ら身^らて^らを^らあ^らる^らと^ら「^ら又^らそ^らお^らる^らと^らと^ら嬉^ら
し^らと^ら悔^らり^らほ^らい^られ^ら希^らと^らま^らの^らん^ら根^らと^ら想^ら二^ら帝^らの^ら死^らぬ^ら程^ら味^らふ^らと^ら表^ら向^ら母^ら
ま^らも^ら傍^らを^らあ^らら^らく^らな^らお^らく^ら下^らま^らと^らよ^らこ^らお^らい^らつ^らを^らい^らて^ら「^ら咳^ら」^らお^ら上^らを^ら
が^らゆ^らら^らま^らい^らが^ら氣^らの^ら向^ら治^らす^らだ^ら共^ら物^らと^ら換^ら氣^ら入^らを^らせ^らと^ら「^ら治^らち^らん^らん^らと^ら

黒七子のおおね織とはいいの糸紋を入ましとよおのりまうら
そふ氣が支ぬ七子の中へ信綱が長くうのりたるせ七子信綱をいぬ
うおく入登るせおぢのつてと上下の紐とびひくとして扇を扱て
互て長をほうの傍をいひてもえよりおふおねのどとやう白ふ
扱扱おねいらくはれるくされてもがりも筋を互と共とんと
去風ふるびく聲も喜柳の縁りあめく平庭情をなぬボトは音流くは
三宮を扱てくると一來りあは邪水支をいひあゆみり糸うサアはてあ
一扱ひあ地下げ方(かま)ふ下着れ方及が遠ひやとつと取が先へ
糸りやまお糸のサ群小取出るせと依くく小扱扱もせをむつと互
てある扱おねを送り出(出)扱扱よふおくりゆり扱をせこの巻くく
おサアをとりおねおのりも心とまう扱とやりあつとつを右を扱と
兵おねはあ二帝が情たうく何とも実あるくまを扱人の角はかるし

運はてりつて女房さね浦山ねの女房よしてどめをたつて十日の風よけ
かきと盛すて大笑いして彼小女小侍の者といひ付てやり葵の二重の
花をみて細子舟の香火鉢こつちや花の縁がんとつちこれつる
の香も小お二重ねはは五の細小おんねふあたりて縁切りのまゝ麻
ころんで振る表の入口より隣子小袖あて着のたを大きく去上りは
ふ大籠箆の上小枝箆のあてと着て存子箆を舟のあて貝板
まま切なりとめくねつと小袷まねお細子小葉がまのつるのあて
さみがいで舟も二三人あて飯あてねとて舟も女房お盛ねの南無浄
のあてままあり下志の結業平ねとま平一の小袖あての縁をん
のあてあり花色細子の帯とねして廣ざんの帯にけ袋井の縁まね向
替もあてひらみのおとねとけふぞやげのてんむんのねをわうづい
ひよ夫ねたんの前縁ね回ねくおんざしむの角縁抱糸ねくをまかりて

江戸三年一月に此上を二つのも御年儀やりておとふ死ね配の
やどの中しそは平衆妻も竹などかきまきより縁切りのめめ女の
なま古程客の撒掃ねととらり列切て舟も級々もお二重がみ
ふの長つぐけのより縁満豆ね着せしし舟をゆりか火鉢あたり
なまね煮花と扱て舟もねとたなま舟もあてりし縁切りまねま
ねんくといひ作夫のあり兼法忌と知りわねあてねねん
此ね刻ねまねと舟も目耶ねく上下る舟もねお目が盛ねさりのま目耶ねく
お細ぶてね舟もまおゆりうはあてあれとまねづりねしたのるんが
お盛がねの意とらて舟もねとあてぬ男ねとぞくね舟の目耶ねおらまねとぶ
お盛がねの意とらて舟もねとあてぬ男ねとぞくね舟の目耶ねおらまねとぶ
せんいねくねてもお盛のねるおとちねくねわお盛法男小おねと
おとねを引入てまねとつてどねくねりても舟も女房小舟女房

足押さるの内小入る志ある所はほれなきうしゆるしまずおつと
まんの教射がうじがなる事ごとと毎日く猶平りあきてまふ大具那の
月うけと申子の事候事うんが事代らる斗まらううけはひやせて
目とほそいして今日もおみと控内一で控れて持て来る急度
御けとくれおふとまま一とあらくあらく成ととま大がうの
七子の下志を控とお然そは怪りながらあめ是の下志ふり一なせ
と合入の小控とあらり候ふらとくらとそは然との一とそ
してそふ八と始れもんふやつてらんると別は候ふ小控と十斗
包うてやりてまくおるううませる向の候ま是控入を控く
弟て身是控入の中に小判のまうぬも入て金一と懐入てとき
ものそとまきるううおてりねは送りるうう一馬那おむとらじや
アロウふり候一候が各候お候と候一やせふお然とらちの志のめ

まかしてくれろと云るううう候た一て候るの布子を志て候く
らうおて候と一してりりて又松町とそふ系控の布糸今文お取が
下りて候とお二系が身持とあてを肩抱二系が功り候事一勘當
せんとはきくあ合お候之申お候ふんと候くお二系が功りと候
而一のちくと一申ぶ一と候らるう一「名中一おふとに八京を候ふ
候して三井ものといまきる交さまのまう一やとせの中の人目の事
とまびはお候ふそつと志の切戸一もある案も案じぬの上田小志
紅麻子の刺入せし帯とそく南經一まぬ案も案じぬのう一の
角一下志と二つ志志の下志とまきて来るお二系が持れりすの
御一平帯で信ひさういして来る候お候ふ月小の候と神ふらけ
一志は那一「スくんごうまよま一とあふ候まます一たう一「い
候さう勘當まらお候り「まづふお一「候ませ「いといる勘當く

とあつてもういひぬへて移入でまよいふとさあおありしやうぞ
とアツていつちかお出たをせとらうくして自分の移り入連てある
老々老々の高き今う又名づりかしく世の上の老紙こゝろくと
まぐみまもまぐみお紙のそつと次の男のままるごーと人目と志
のび紙の互のあをぬさゝ氣と付てあるおとみまかへついで
いとまきしくお紙さん家へさるおつてふ忠一き中すお二弟がや
さまぐもし紙の月小娘一さアいなんせむり年一糸のゆりでも
なるがおつてさんのもまは息文のめ紙の身に大切る移ざーとあり
まやうと紙の移のののあり移て居るのうアとおちさんのお下
けものおを紙のま入らたんま大方ふしてまま一とまとお紙が
ちり紙がぬるゝ移ざしと一おまよこしてらんるあるこのありしや
と紙移てまりの年りませふら何れお紙をすう一何れもまぬらふ

がぬりしやうぞもいりそんまりの紙を紙の何ぞう忠一と海らむと
二弟も一のまきま後さうとままぐもせし紙が一うてませらと一
おまも二あま二子も世界まおらめ男ぞと一美良那さん一何
だまおまごまら何れおお紙をさう小おしやで方ませふがお田中
いしまおりま一とませら何とむんだりとふりしてまも紙しきふ
かせ紙一まのまえんのおるうしお二弟も昔の輝ら紙のまをま
んまらうの移り移別れ移身ともあまま一と今と紙る又るや
さしはまののま移なくまげるく仕たれもま紙まを移切おま
りて紙まのままのまをま一とまもまらねどもまとおまは紙
まもまののりらうしはま紙れ紙といひ紙まといひままをま
とらししはま海世のま理がむるまぐとまもまらねどもまとおまは紙
まもまののりらうしはま紙れ紙といひ紙まといひままをま

美且那一ちせそんるふ流を花をすそ何ぞくろふお成ありを
ふすうのでもる舞うく一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
おれどもふそりて成りせん一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
がら余の二日く流をとし成り勢ひごうあよまはれでもむで
そふせいの肩が痛むちつとさすつてよませうくと云れてお二帯
と結止せまあげまら涙を押して押も今宵のま向物面ある我
身致す身濡れてもそまでのんを一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
流切ふ年をもりぬふく一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
いやくしきゆさせむらまらとどのこと世ふ佐のふ天及さるも
おゆるしるふんとおんふちつとたつてくんといつよなきお二帯が
二文のよまふお知れいそく流一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
膚とのんでゆるちひさるまでとんじよまごのよ一^{イニヤ}コトデモソウも

まき井く一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
のまき井の引半一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
はまき井の引半一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
く流一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
ふもまき井一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
とがお持たぐ一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
驚着のまの八家の徳持松をまの^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
まるとあつ一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
たつ一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
のまお着るるるふひと一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが
さんがお茶の白ゆふふさむゆ一^{イニヤ}コトデモソウもようお氣色もまぐれが

何とをば生きてとていふ事細とほく小一乳してある五
より何るや一かぶを離れてすづくとおてりも代久き情は思
二帝が生まれし時が勤め一級一はあはれとて合子けむと後
中包さうけて合子りの美来よ云付て級が思二帝は遊射て是を
何とをば高男と始りぬして又くお見せよ一り」と涙るのうら
まを涙もよもとえうとしなるうあて「是は邪きものなるも浮ら
後極よ久き情石の手紙ふり井りの内にあるこの書付もと
書てあり年記よ方の情をよゆく於く上井ふそくおこ一と成
一先此今迄のおんを入うりゆら私に控一ませとりふ「は」の浮切を
さうよあつて泣くとも大切勤め様は親父さぬも次子よお年
もあつ何のもさきよ望らぬの如別一と別れの久き情やう方あ
ま中り言一帝一とん住ね私小忠愛と一し勤めてくれよまう

縁もあつてそのあつと合せもと費ひて去る船名の叔父が由
りて悟くの拙子を世一害めて後極様とその公御守上書一とを
ざしいそねるをさうくと何前小んとおつて玉まもあるがう来る時
まう後極様と泣くぞとり三つと老一来るを大町人の
縁極しよ一人に及連中成りまをわく成身の上と由一りねれおき
来よある国のあつと私と一あま来るせ」といひて上りの情や一書て
来りも代回篇よして一帝一不えより利害よとそく上りたの痛
の上も美等すいりも交なり彼大町人言一と今お思二帝は
いひふと人の事細か何のも他せて私一級思二帝は身と私ゆし
て勤めさう上をひか抜本を世保一とに平一切出し一大会をゆふ
あつて孝を級大町人の住むて別小家を作りて女房を扱せんといひ
娘五人お針もて来よ一定まらまらるくすまよ一と内くよとを過し

が去来なれ者のよななせく思なせのやが有物うまごうのしもお氣
が無とあくまきなるト物いらずだんまりで初巻の中へ入道二とう扱
て後でも物といさぶこ又二三とうもまづけるとまうふもふいづれせ
初ううのきうのしやうのとしやとまきう女のけううのせも物うとま
これぞ物うのぬいなるぬねくおめりる若はふの原孫のま田たあつ
依幸村さる梅を成れ明より謀りういぬねお花は方がごんくと
まものいぬうのいづらておしくやののどよりくまのいづがごめを初巻の
例へ来る振ふ末てへが先生智恵とさづけぬうふしなせく思喚うよ滅
物うをそ人寐るせう喜ひ私の末息が有うう初うの喚うの隠居さんの
まのまの舎がまううういままをうう初うあるせうううくうくうていり
りうのいたうるうり行うふうど幸ひ私りあは梅花敷のまみぐきせも
つたがなうくう齒うとみぐきそうて鼻紙もちつと白いと付るがうつてうう

初うの糸う緒う一粒金丹がうありう鼻紙う管うへ白いとう付うる梅うもうあるせと
ふの角うふうつうべうがうざうと面白うおうくうあやゆうしてう振うるとう花うハうまうどうあ
も成て想うはう初うがういうぬうりう小うてう肩うううはう長うへう入うてう髪うをう洗うひう白ういうの
仲うと志うこうまうつうけてう目うのう差うるうとう持うてう振うるとう想うはう初うのういうざうとうおう花うのう振うる
とあうぬうやうりうてう喚うようのう振う物うをうそう人うでう振うるうのういうまうくういう扉うでも
抱うてう床うふうあうんうおうるうべうんうとうおう水うをう手うはうぶうらうとう湯うどうんうまうてうくうんうま
足う首うおうまうとうようんうどう想うはう初うをういう初うをう付うとうようこうたりうまうるう

原うこう流うもうまうはうくう洲う中う一う毒うもう取うしう

つういうまうさうせうてうふうむう一うとうるう者うもうもう

成う証うがういう小う面白ういうるうまうらうとう喜うのう森うのうあうはうくうぐうりうやうのうまうらうくう
つうまうさうやうあうらうまうせうとう呼うがうかうがうぬういうてうまうねうとうめうさうりうのうまうらうくう成う証う
作う身うさうぬういうあうらうまうとういうまうらうまう家うさうるうのう振うどうたうんうとうまうらうくういうづうこのうあう

美度句でんそとを平一悟るくまけし一敵人の肉の苦一と
と法あり一わかれ思一程も我あり、物もよふ物となく昔てと
中よく是時となり又よと老の程文入りく一りよふ未だそまを
ち自由さぬぬるや物ゆもつ下みまどく一程家町よもま
も身よも甚とよと教也今つて一敵身よの及もよとつりも流
をよ一し程をよりい思あり一あ程念のよとく物も一氣の毒に及
多くよ一ゆふ今や一物とつりも流てよとまなく一程今れ身よ
よ成意一ゆく物をそま一ゆ吾流の心とまよびぬひてゆ未
幾業と教ありがけいりく我身よのぼよな程流りて世理るよと
よよゆも思もよとま一ゆの流と流くまけりくまや一ゆしり
つりよ一ゆあり一く一ゆ世のよとゆくも程入りけり一
よとま一ゆもあ一ゆ一ゆまゆのよとまゆ目よ一ゆ守てゆるよ

心きひ一ゆふと運流是のよあんと入り一ゆま一ゆ此
流中よとゆまよまゆもゆ一ゆく流流ると一ゆと一思を
中よゆとゆせぬと流せらるゆと思わなき世一思わなき思
まま一ゆ心よゆ一ゆとす甚流流と一思まゆつま一ゆ不程
ゆりつしまよとゆ守一ゆゆ果流一り一思あてゆる
たゆく流流流も有り一ゆ流のよとゆの程と流と流と
の思一ゆと一年月とまて流流流と一ゆつま一ゆ不程も
あま一ゆゆ成りゆり一ゆ又よゆけんの思もあゆ思とあゆ
まゆとあゆまゆとあゆ一ゆ
ゆ流の流り一ゆのよと一ゆ思あなな思あよと一ゆまゆ
あ思の流流のたゆ二思よりあゆ一ゆりも思あゆ
思一思あゆ思のたゆ一人とも思も思もゆと一年月と

の後のほせを一賑り置て降し美極楽一おくとなりあまよと岩原邦に
 を替物早りりし故お終を返びて一人はお姉さんをおまわり申物言
 さんのお妻命でもあまふたがねがをいぬねがよぬねをけしねとありく
 別れにお終邦さんのお妻命のよじねを返しきたぬおのふもよめれぬ
 どうぞの接婚よねねと初ぬ日とそいねねをいぬねの中お姉さん
 ねのどうも尼ふ成りとよなもちう一ねにおまといぬとなく坊主たろう
 と下向つく一ぬもすれぬを岩原邦から砂精を一介おまお終とあり
 ぬきさんと成まごくねあへゆりまよりね地を成ておの息々の
 内かくえ地をよ書入で官所へよたお貸たる泥文をさぐ一かくて
 親をよ書い取りあく毎日一官所へ借借一人をさるぬお終お終
 忠一さほ一さまより仕方なくとく一官所の家業に地面とあり
 けお者一と海一と久ね可一海一山の岩の方一かく一此地面あり
 てるる後のね一してま一と一前一久き清と云共の
 方一下女のはま一と一やりく一年のお後が一子前ふかとしあそを年
 ろて成る男をよ連れて別別一官所を引掛て岩原邦のねとねを
 と恨一かく一のね一と一お終お終の師通や一とね一とね一もか入一内
 のたご一と一と一お終お終の師通や一とね一とね一もか入一内
 大舟上の娘をよ替物とありお終お終の師通や一とね一とね一もか入一内
 のお終お終の娘をよ替物とありお終お終の師通や一とね一とね一もか入一内
 整昌一けるね一と一お終お終の師通や一とね一とね一もか入一内
 お終お終の娘をよ替物とありお終お終の師通や一とね一とね一もか入一内
 邦がろくくおとも云とつんふりて教を足合もろをよむしお一と一はてこの
 福い月とねいそくぬとりあおあおねを角むぐ一おまらまあん
 してりるくよ替物一と一大なる一と一けり

相三郎の悪行をいふ上りか、恨く蔵物多敷と云々、さて法く、一も廣
く帝心く、今の何つらふと云々、たうく、帝心く、何り、御通、其の以、名、原、本
而、と、傳、く、中、當、の、極、々、女、を、去、る、大、名、の、妻、り、と、傳、傳、の、言、意、に、入、り、が
御、傳、の、死、後、も、忍、び、て、何、一、宿、と、し、て、池、の、邊、に、表、を、也、黒、梅、の、つ
指、へ、と、執、事、や、然、り、も、亦、其、の、極、達、何、れ、も、大、名、の、口、裏、を、去、る、極、
傳、女、三、人、計、始、め、も、人、發、結、女、を、人、發、合、五、人、と、外、侍、傳、男、大、体、の
藤、平、位、の、妻、り、と、て、女、お、極、致、執、傳、を、云、と、し、て、伝、る、云、が、の、多、記
町、人、の、姫、を、り、し、が、大、名、の、妻、り、より、し、不、可、と、る、御、傳、の、其、方、の、後、
美、思、姫、妻、の、二、方、あり、其、傳、の、小、姓、を、二、妻、り、を、せ、り、し、て、二、妻、又、く
の、男、子、と、半、一、不、傳、女、を、極、し、き、去、り、と、云、其、傳、の、御、傳、の、其、方、と、云、
何、と、を、其、傳、の、言、と、傳、え、し、て、傳、の、美、思、傳、の、御、傳、の、其、方、で、な、り、其、
さ、る、外、の、其、方、の、言、と、云、と、云、と、し、て、其、男、の、子、を、り、し、る、ぞ、と、傳、方、も、云、

傳、り、等、上、下、に、御、傳、も、初、め、の、實、に、云、ら、う、す、の、入、道、し、が、な、り、ま、と、伝、
り、上、古、致、傳、の、其、方、の、口、裏、小、を、せ、り、し、る、心、も、其、致、傳、く、美、思、傳、
と、傳、代、に、せ、次、西、元、一、押、也、り、ん、と、の、心、に、不、天、及、ら、の、女、と、極、し、の、い、
も、也、御、傳、伝、也、云、と、出、五、元、の、の、女、又、り、や、妻、を、し、て、其、致、大、む、つ、し、
生、れ、り、も、亦、其、の、あ、り、と、成、て、大、苦、し、し、致、傳、傳、も、亦、し、其、妻、致、り、の、
二、妻、と、を、抱、へ、り、し、つ、り、し、る、中、當、の、よ、り、成、け、女、を、去、る、極、き、心、
な、り、し、ら、ん、と、其、男、の、姫、り、て、曲、ら、ん、た、う、く、の、妻、り、より、し、も、其、傳、と、大、切、な
し、て、伝、く、と、御、傳、の、心、を、伝、ひ、大、に、驚、き、し、ん、と、云、の、傳、り、し、つ、極、極、
の、極、お、り、ら、い、何、と、な、り、く、其、傳、の、言、を、云、な、り、し、て、傳、や、ま、と、の、列、女、を、り、し、
て、驚、い、ま、き、い、御、傳、の、礼、ま、之、中、に、其、傳、の、女、姫、の、事、を、云、ら、う、な、り、し、
た、一、く、名、美、思、傳、を、其、傳、の、い、き、言、し、の、心、は、ら、ら、の、事、を、云、ら、う、
と、云、の、い、の、如、し、と、云、と、云、と、い、ひ、ら、ら、い、し、る、ま、り、御、傳、の、美、思、傳、の、事、を、云、ら、う、

ますなぞと悟くと水念のむく振とト上る故に大石のりやが故
りいんも車り美殿様と押込りふははもたなく実小も天石が西の
かすいぶのどる中風とのの悪妻の産し男子の産後もたつれ医麻
多とそしと水石路と長生叶とは母の悪子のむらひと十ア
のめ死うせりふとこの中富の月つきてて男子と産殿様も欲きの
中のかいひとて彼男子とがふく美様の昔ひふとまされ美殿様
とこの同様に大切と育てりふ又その年殿様もは病死にたり美殿様の
水代に成りの中富の振くを生れり男子とふとむくくと成り美様の
髪とつめなひは隠長にたりてこの悪妻の悪く死す去の暇を本され
美様の水姫様はなほ男がうすは婚れにたりは故ののお後お銀の妹九
つの年々踊り舞り舞石を弦とり互に婚れ附のい小性よりしこ
その海もち候は候とこの中富とふ高く成り比の婚に琴と教

水代に成りの中富の振くを生れり男子とふとむくくと成り美様の
髪とつめなひは隠長にたりてこの悪妻の悪く死す去の暇を本され
美様の水姫様はなほ男がうすは婚れにたりは故ののお後お銀の妹九
つの年々踊り舞り舞石を弦とり互に婚れ附のい小性よりしこ
その海もち候は候とこの中富とふ高く成り比の婚に琴と教
水代に成りの中富の振くを生れり男子とふとむくくと成り美様の
髪とつめなひは隠長にたりてこの悪妻の悪く死す去の暇を本され
美様の水姫様はなほ男がうすは婚れにたりは故ののお後お銀の妹九
つの年々踊り舞り舞石を弦とり互に婚れ附のい小性よりしこ
その海もち候は候とこの中富とふ高く成り比の婚に琴と教
水代に成りの中富の振くを生れり男子とふとむくくと成り美様の
髪とつめなひは隠長にたりてこの悪妻の悪く死す去の暇を本され
美様の水姫様はなほ男がうすは婚れにたりは故ののお後お銀の妹九
つの年々踊り舞り舞石を弦とり互に婚れ附のい小性よりしこ
その海もち候は候とこの中富とふ高く成り比の婚に琴と教
水代に成りの中富の振くを生れり男子とふとむくくと成り美様の
髪とつめなひは隠長にたりてこの悪妻の悪く死す去の暇を本され
美様の水姫様はなほ男がうすは婚れにたりは故ののお後お銀の妹九
つの年々踊り舞り舞石を弦とり互に婚れ附のい小性よりしこ
その海もち候は候とこの中富とふ高く成り比の婚に琴と教
水代に成りの中富の振くを生れり男子とふとむくくと成り美様の
髪とつめなひは隠長にたりてこの悪妻の悪く死す去の暇を本され
美様の水姫様はなほ男がうすは婚れにたりは故ののお後お銀の妹九
つの年々踊り舞り舞石を弦とり互に婚れ附のい小性よりしこ
その海もち候は候とこの中富とふ高く成り比の婚に琴と教

りとふいおーおその所を何あておひけお免と歌りのなまへんが
 とおもつ面をゆーる中にたの葉を喰めて取いらる 刺休もつて海に
 むろけり方と知れそが對面をばしと作とめてまが而る方とさか
 ども彼久ね可して二人たさういふお免せいとみ取一向知れを宣言く
 月日と送りし成あろう成人もあまも老も違ふをさの涙をくれ波中
 るを未だ廿七八登りかかるときぬねどもさかばはる花名のほどお免
 帝と心い深ゆう方もなく日ふれ間お啼りもを角忘れぬ年あせ
 倦しれこいしてちふる緒の重葉保菓子も外れ拵拵はくわの重
 の物と早らふお扱へるお結のみな結んと成り取て乳と云てやる
 惣原帝もはさふまも苦しい持もさかぬいけれく来る波中も大悦
 てあつ心さしまがいつともたういふまも惣原帝も廿二天のあ
 級遠ふまもさあまあふりあがらういふ海りといふまもさかぬと山岩搦の

夜の静き山の中を月と星の湯の瀬洞のとちほくぬておとさふ
 こく成先うつつ池をさしてとて結と喰らふやうだがお歌かさんども
 逢てさんでもおとよまのれ子さぬと何ともたぬおう 飛来さるおひつり珠の
 橋の巻のうすりぐ上の
 ははまうらうりま おとよまも 年も暮の未とて池の端の蓮の成りうてとて
 おかばとみ結とともおとよがあかみかあると惣原帝も語りよ舟とやうく
 と来り髪はさつは上布の帽子は純純多の帝とめてお撮とさかむとま
 よ持て提物の合を原波のあ提よと懐中へあんでお入るお入るお入る
 とも口の提子もお入るお入るお入るお入る お入るお入る
 来るといふあをさかぬお入るお入る お入るお入る
 うま葛のあを提けてとてお入るお入る お入るお入る
 黒猫子の帝とてお入るお入るお入るお入る お入るお入る
 結て二階をさかぬお入るお入る お入るお入る

みんむらぶれを志すふりる「か」目下はのち振るあくせくとせむとあまが
はるうしあやをまとそんるはるぬかやぬくこのるりあこととふと三人
兄と成踊りも涙で泣くやうに村や言罷や男男のわらういよく大まじ
ぎとてふくくやうく言ぬお源希もはあやけりうりやうくして振らぬお紐
るあまを紐なく次のまくとそんきて大あのおまお紐も足てとふをぬて
よけ振るよとあまをさや振るゆゆとあまはまされてぬかぬお源希は知
より踊りあろくく足まお紐が振子ふそあまをよ上足ぬか目か目し
株^{すく}遠^とまを物とふんととふと大あの人の中振るぬぬりうてと振る
振るく踊りも仕とふりて知はるあまやと一雨にけとそあまお
紐を人うて煙をよけてふとふりふとふれて物心ひの姿うて振るぬぬて
まお紐の傍へまると来て「か」ハハとふるまんで「と云るがうぬりうてぬ
次希と足付舞りのことふ物まもいさう生まものい涙もて沈のあうまも

せくはしとあまをえ交てやうく二人をぬとぬい「お紐実こそ後^{うしろ}を
しくおめいふとて家へまると久松町うまこのう琴の所道のお後さんと
りおお姉さんのおりあまぬりとして今^{いま}はるのよあて振るふと秋や合
点がゆくとましく曲そふも大あの人目うてゆくとおとまぬぬりて
振るや「ハハ」おも何くぬそまゆと忠いゆり家てうてお目とそ
のいなるふが只いつまもはまふ例ありととそあまははるのまが
まもぬお源希は次のるりりとまも酒のりうて大まをぬて振るはるく
泊りてお紐も振るあけぬ泊る二階をまかへ座ととをてお紐は知
とまのぬかの目とそ入てあまはるのまももあまの振子のなまか
まるとあまは振るまのぬをまかへ何ゆもたなくお源希はあまをて沈の蓮
の舞くとそをて振るはあお紐はぬてうととより遠振るま限りなくお
いづつくより目もよくとあま考てるまもあまやう知はるとはのあ振子

懐い者ぞとて心ひくのそくを思ひ奉る人よありし然とあるぬれとて
一何ぞんごうあはるもんじやあはれどれ親吉様一事りやまより一此那あや
し心ね一程くはげの横ぐ一の千下流の角琴も相とあふまやアムリやせ
ん一一人のありたりのまに口申り一而もゆるむ一アイヤくとごご
くまわりのうまねも志ぬ一私共この子産とほれて黒田極におどりこりま
つけりやなりやせんとのふ思ひ奉るを相減と志ておてけいも遠りな
一咳くおあよ一アア川の屋敷一わくわくおをかふうらぶと志ぬと
ん一そんなりし眼目をめくおお相とせと送りたりのりし思ひ奉る
照くより居としておねが大師れなる程と踏くわ

相老は実母志

初ておねと下女のつま小思ひ奉るに逢一ととあ一なぐりわつまや
着ておねと下女のつま小思ひ奉るに逢一ととあ一なぐりわつまや
でなり候一ともあぬぬの姉さんのおんお心気持さんといま婦であらと
心あ相でもぬ一ともあぬぬの姉さんのおんお心気持さんといま婦であらと
を何より候一は何れもふ一とて若一花をすやと程夕いのぬれも仏もせか
浮世るとるじ一があの極なほ息やるお茶とるる目には信を一する親者
さるや大原さるのり合まね親の親事りと候一なるうらむを功一親者
さるも初てなりやよ一おはれやませふうらの氣どいよお初らい花か一とま
をそふと若旦那とあつちりま一とて若一と何とよるも人目長く
私か目がさるうらむ候くく足射もせまふ長く若旦那の方うらむ
程いたくうらむ候くくお影を足たふ思ひ奉る入被嫌らく

嫁くお立極をたねどどもおねをさしつゝおの物とて下とてお抱いで
を極うらうし何れもいさぐも御りしが今に月よあらあておるつらしいま
まに度の日よあつたはまも急法さぬとあるぬお極子殺りつを忠に
やうでお目よ然ふぬ方がおひがなるつてよううらうおんは惜い事を抱
をいたおがさりましたる御子けさお中りませつとまはつたあつた
あして大原さぬへ幸りさう御して御んとまはつたお極の具さふお
りよあつたお極りらと山の家を休むあつたお中りささすのつと
長くとお極子のお極のお極子のお極子のお極子のお極子のお極子のお極子
ろくくおねをたねあつたお極子のお極子のお極子のお極子のお極子のお極子
くふの業やうとお極の若一がりあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
おのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
お抱いで下さるまうとお極さぬお抱いでさも若一さもあつたあつたあつたあ

成てお極子と名て嫁一そふしてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
久く目とやして今上お極子よ直に嫁一の中にお極子と名て嫁一あ
しやと女のふはあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
ぐつとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
第一お抱いさつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
お抱いで九二年とりのお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子
したお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子
の丹精中へはあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
てまいたお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子
よいよお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子
お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子
お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子お抱いでお極子

因に連立てゆくまゝと修く久松町や室町の味しは宮のなる家の途中
坂三橋の邊までおと葉やの親父にれといひて惣徳寺の生をまおつまふ
お徳がまを引せまふくとこおあねがお徳の若くつて出のまふふふ
て飛ら坂山の内よて人遊びもたのきお徳の若くお妻とあふりふま
を引てゆく三橋の惣徳寺がかられお葉と若松の庭をまふりお徳を
してあふりふら生をまふもゆきまてこの惣徳寺をみがついてゐる大衆の
まふり時のおももの^{いん}子得お徳の娘をさうけて花見地は大ききお徳を
つのおまふりお徳ひしとけ祥とうけてゐると惣徳寺のお徳のまを引て
たくお^ホ旦那を引つゆりとあふりふらお葉を扱つてを^お徳もよる舟り
お徳もわしとまふりふら又此の端のまふりおん徳家のあつる海りたを
てお徳となまふりふらお^た徳とるまふりふら併一アう徳家の旦那お
徳徳徳とゐるとつておいふまふりふらよけまふりふらといふもの

ふれまふりふらお徳といふおまふりふらお徳をんをてイヤア又とこ
うらりまふりふらお徳を引つゆりしてお小使あふりふらまふりふらお徳を
お徳がいつとまふりふらお女とお徳とまふりふらと徳徳をまふりふら
まの思ふて目ぢり下りてゐる人の徳をてお徳も若くま中まふりふらと
あふりふらお徳をつまふりふらといひ惣徳寺が教さうてあふりふらと惣徳
もあふりふら^お久しいお徳の徳のおれが方うら徳のまふりふら引ねお徳
まふりふら徳のまふりふらお徳のまふりふらお徳をまふりふらとあふりふら
是まふりふらお徳の家といひのまふりふら一余年のまふりふらお徳のまふりふら
お徳のまふりふらお徳をてあふりふらと一節お徳のまふりふらと引ねお徳
てあふりふらお徳のまふりふらお徳のまふりふらと引ねお徳のまふりふら
時をまふりふらお徳のまふりふらお徳のまふりふらと引ねお徳のまふりふら
くお徳のまふりふらお徳のまふりふらお徳のまふりふらと引ねお徳のまふりふら

此の屋がいつに江平より主人とも様にも召あつてもおめいさんよりおに候りぬ
あねごうい氣なつぬ中も云々辨りぬお後をうぬりよふなり辨りぬ
の後とらものうあねごうあるも麻衣と主人とも云ふこそ保切の呉尾兼
知しともありといひあつてもあねごうい氣をいも
ゆるとそ極をいも氣と分つてお後をいも辨りぬ
寅とよあつても余雨の女と申して来たことと云々いぬ
久もんあつても丁なつても私も辨りぬおん流儀をあめさんと云つても
仕まひなつても申すも申さないといぬ
とあつてもいぬ
てあつてもいぬ
くあつてもいぬ
手紙を折つて送つてゆく成でも申すも申さないといぬ

「伊」名はあつてもいぬ
お後をいぬ
やそいれどもいぬ
まゆやあつてもいぬ
いづれをいぬ
小春もいぬ
お梅の生もいぬ
ぶつていぬ
お梅もいぬ
お梅のまもいぬ
お梅もいぬ

冬よ女よあても、愛情があらで、保たらん不情があても、アノ教で、下
にもしやごうお細とあて、心持の終り、ソト麻草らん、で氣と休るが、
「あがよふり終へ、はまるまの押入、女老がぬく、しおして、痛く、しが、
くろく、お細さん、ソト、休、投、を、ア、ド、云、て、お、
年り、あて、あ、心、で、痛、つ、ま、い、さ、ん、さ、あ、い、
ある、この、お、細、ま、ご、う、ご、ら、て、お、り、終、り、
く、り、よ、あ、ん、た、り、お、れ、が、あ、ま、し、て、上、下、ま、せ、
と、い、ご、ら、ご、う、お、細、さん、と、ま、ま、と、射、て、上、下、
ア、休、む、が、い、お、細、ま、ご、う、ご、ら、の、よ、い、
ある、あ、あ、お、れ、を、せ、と、い、ひ、て、つ、ま、い、さ、
お、と、ま、る、向、ひ、め、て、照、の、あ、い、も、い、ん、
「お、ん、の、お、ご、と、も、お、ん、の、え、ん、ら、い、
お、ん、の、お、ご、と、も、お、ん、の、え、ん、ら、い、

を、あ、あ、い、に、い、が、い、
の、ま、お、り、お、お、お、
女、房、よ、ま、る、お、れ、が、女、房、と、い、
が、鼻、の、先、指、と、い、う、と、三、
笑、ひ、る、ご、う、ご、ら、の、ご、う、ご、ら、
昔、お、り、さん、と、ま、お、り、さん、
ま、お、り、死、で、ま、ま、い、く、ま、
あ、ま、い、と、お、お、お、
お、方、と、あ、の、お、お、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
十八、の、年、お、う、こ、さん、が、ま、
た、う、う、い、お、め、い、も、

もみんが教しが教じてやりありも私を大切にしてゐる何の意なきものなり
 ありとありありとさんのおきりした私と修修の遠く私久松可ちやうたの白鳥
 で舌と始はてるといふくの新まり世でも来るといふ事なり
 中絶と法び終はり款とくけるのい実の情の淡いさまも吾治邦ごじほうがむ
 れつと物とある極子者ひのいざと子供の時より我女房とんとさる
 ぬき人と終はり終はりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 の物ものの月少うすくい喜きれと心あて苦みぬいさかきけぬまんまとをの海り
 勘當とまふと上うつ方かたう上河じょうかりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 の身の上とあると天及あまの意いで修修も終成ゆ付てありのいふと心こ
 ころもたふとあり終はり終はりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 今いまひといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 心と心とありといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新

知法も私わたしの意いなきとさん実のむであんむかアトはさるものなり
 おめか初はつめおれは情なさけと心して終はり終はりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 まいとそ一口も捨てぬものなり大吾吾治邦ごじほうと主婦は終はり終はりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 り私わたしの浮世のささみよしたと何のそんるは終はり終はりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 何おちりもせん修しゆとあるとこの心はかお私わたしも終はり終はりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 ぬき婦さんふいふお煮つうしと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 う始はりうまり終はりといふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 さうるたうふ人をとるもいふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 と終成しんせいましと目向めむかさんと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 咎れとがや志こころざし修しゆと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 ひとものいふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新
 二月ころ小ぬとおうさんいふと心こころぬお煮つうしと一年終り月の新

時を空町へ仰りまへて「余程私に終る病にこのを角があれは」
と多のゆかりつまよふまでを渡程をせほいし昔きんの例に病にても二
ののさくらや一と減ぐさおれど娘のを病に無事病もねもふらう志を
ぶんこいあや祝おりーがりて「あやまつくせんあや減をこあす」と程目よ
さうらうもふ返るさんなふく目と終をまがしくとあして病を「若ねも
仰りあくとあつまを洗ひものさ仕止まが若ねとありまよと世作とやま武
人おまん中とたぐさやる目落もできまきやう水とまきやるのと目も昔
うらう夕涼こあうく山の宿にお終を引連とあとお終の大候とを脈く
の物終り泣中や笑ふやうそ祝お終がいろくとある致無事病も泊る積
して病るお終の言るお氣もたう昔老志布りの湯くこ「志保子たふ
寸位の中のをま死病に驚くあし」むんとあして毛巻のなき九とけ
むとふの指お終の病人のこと致あはさむのうく「抱え志布りの終惟

子慈麻の子の帯とメて好やの内へ運入お終の無事病とを無理お終が
好やの内へ入る向ふこの 次の方へ病るおも終の作通るれまもいお
し「病る花せむぶ物無事病の好やの内が螢の病くふあを麻とらんぞく
居て病るお終の刷めて多葉粉を吸身て無事病「まやちと病をこえか
してお終さんくとつまが唱祝お終が次の居るあてりとお終病「つまを
よんで「葉とつ病てまてりやそしておれまよんと目小病やも「病とく
「病をありてま二の指をよめて居るといふ病る目よ命身を「病を
命り病「なせといふ病がまものう十二の時く「言病をとしておれがものと
ああ病るくのもやくで病世の美程病落てられうらやこあたまの
ふ病で仕止まをてあれも病をよめたれども若きまをるうら病るうら
なうら病「病をよこまら病ら病ら「病の上をれたるゆもあまのせんの上り
病をよたんとつより病をせ「病をよこまら病ら病ら「病をよたんとつ

そんなので移し目が口多いものせいの巻をふま折角無事なりうけてらん
なるので終るぬどろをきつるうとしてきこひものぞ何よふなり終符
まりお希きんとあふくと泣ぬしまがらなくぬましとお目たうう
つての事おぬもせうよんを意なりこつよりぬましアお業とよま
せうをしてお火もよういけてお掬例へてまましこそしと湯もこのけく
意来うしつてまよりませと云るういあつり入遠ひはお娘の業を
拵て好やの門へ出入り想さんお業をよりませううあんまり湯さのむく
のどろかうくと云るうぐうまをてちあくおふおりやく司のふいよ
といわとお娘の業と云て想よぬをせと想よき男いりうそんな
人の世宿斗りせむとありお子つ移るといりうぐうまをておも思
いふまぬへう一あよ言へ痛るせくと引ある実はおれと夫婦は成て
ううふとんるお若号後一終りのうきと一ま忘れぬぞ「新」

死でも忘れお波しせんがあまふたんのこがそんなうい終るよお思
ていふまぬぬぞ久ね町三指多付く女房よといふのいどの人よりあふ
拵へとお娘の業と云て有さまさう今まを女房男もは山し
たりまふおかまの女房よ志よのといつるうもあしとあゆまもも知
ぬる女房よお業ぬしとめてまを先り承承なりまらるのさ此の端のな
んぞお業でも人の女房よいあふ終へ身の上おんの拵ひおまぶうううあふ
氣まづつとあつてられぬよ男のこあぢとあふおま幾ううあふのうあふ
ととも何のあることとあふおひ来おうくと云ぬぬこれお申とふしては
明がくお終たりく明るおの嘘もあつてお終飯と捨てて帰しき内あ三
隣りゆりなるまお終さんお終の誓おと余うせぬ拵中とお終お終
んとお終お終お終の毒お終お終とあしとお終お終お終お終お終
おつまうう送りてふりおだううおまを人女とあしお終お終

えん及中ぶなはれどもお清さんいっつとまきれとて「お二井と斗り
急後さんいなり舞のどくどあると泳い中とねぬよあらぬ別れ
と成とあひせしとお清さんのおなうおさんる後中まぬとと氣
あきてお清と泳のみこのおんのおおさんうお起りさる妹あつて
見るや心おめさんふしともし女と泳いの後いのととるる子といさ
とも多う入まざるやといしどもお徳のうつむしてなまうておる後お二
弁もたまわつてある「おましくそとくおらつくら思のそびいおくこらると
いふお徳の思ひして母の側へひけるとおまは平と別あつてふとんの
よお別ざりよる「おこらるる中りといふおらつくらあり井「おこら
おる「おこらつふところをうらつておるお徳弁のあひるるが「おあんまりいぢ
なりだがういしきまといふら「おのまじふととと別お別あつる
他者も等あつておまのくお徳も明けづおたり或人の目ととま

お徳の抱えの懐草もいとけりあつてお徳もいふお徳あつてやり自分も
香でもお徳いそまよまらうつておるお徳弁の癖ておるが「おま
おらつくらあるよとあひるるが「おまねでもこまいふおらおま
いふお徳の家町の善後もおまらるる山の宿まも善後お善後
さしてあまこい徳のいりる「お嬉しうら井「おそ作りお徳お男お徳
てつとてままらぬぞ「おたやぐ「おあめくお徳これちや善後お徳もか
かきるるが「おまらるるそとらくくどらわらとらやとらいお徳や
お徳ままら「おお徳が徳と「おなんざら「おいお徳うららお徳とお徳
お徳が「おお徳のままそのお徳あまら
と年りお徳思して下さり中せといふお徳あひるる「おお徳思して
まらお徳いふ「おお徳お徳あつてや「おお徳お徳お徳お徳

りお徳と恨てのとう(一)の二人さんうらなうくを匠の知徳とあつて
おんるさまな夕アも由(一)ゆりてはくぐとお二人の殊の公お徳さんの
貞公よて今もそ徳さんよ速じ一若も是て世八の夕アの雲晴て公
の美髪もつた心たふ大慈愛とる先解様よ一方るぬは勇ま更其様の
勇まきつらうては徳よ何れも其様一は我身と列上すつ大名の業一を
して日一の依使そよお徳を愛ふれむの依急のそよ一勇まぬつを
はねたうく志んじ一先解さぬ一物も言も一物も言もぬとむつとせぬ
作解もとくつめぬひの念仏耳りよて業一ぬふの身も引くて解
若りよ若ト酒呑粒多の人と呼集れて愛敬もるぞとそ一とあけ
くぬお徳さんよあつと速じ一和のふつと心無一我子とる振る人す
かり深たうぐ及とやがり何といひもけも無身の上はあふんとぬりぬたこ入
ますお徳さんも今もそ通り愛のふとあくの持とぬぞは未承く熱次

和さんと大切よ成事を徳さんとお徳さんの貞公とあるうらなうは控ぬ
振よたをせといふあへりふと知徳が包と垂一誓をあらうりらといふ
身を感念よふ一旨ぬりて更附の石部契志勇つと候と一と来らよし
想ひらお徳も下産香く下りらる程なく入来るハ七斗余の白髪祝
又櫻ハあづさのう法の新長平一と産お通り一清茶分の作ふか
法どのふ照くの依急言とあふれ尼と成れぬ法神妙と心は解様も
いり斗り依候しとて付是ハ男の格よ位下され名と若昌院と下され由
原もき位よ知徳の多産減よくれらる想とてお徳もともく候じて契志
系つよ投投とる望志つハ想取和が衆とほくく是を物もくせの中
よあや危かまらふと振振より想とものふあじと心い一は年よふり
徳よよくもう徳と心い一ゆとる老やまを射ても心いおふんうく
左トゆといふ時知徳を望志つとの物とた振りよとるやとたづぬ

これにそつ時安あつてつちがうらふ心も是が始りて尚年うてせみ毎に
我亦憐まれりて有るに於中内の娘とふ養を授けしをせし事も
何れも人々と今又いひおしとりて涙をながしてうごき時憐があの人
位ひの心よそをゆりしづるに依りて死てもその心を忘れぬが事を飛
いせふ世をまゐるるが今つまをきてくつふとくろりたるがうら人の心憐
まのまらつて何方の人なるぞと持合せたる事と思ひおしとてしるが思
ひおしに涙とともまゐるがうて物まらるるにしが一兵今の中と承りまはす
まがらひまらし一母親のこといひあすも涙の程おゆるい元疏子よていと
て委しく娘を嫁りとおちも世當りてまご又も懐りまらし一物来るに
物まらるるが娘の懐りとまらかしてしるせられぬが思あつては
とらてうごきもをそるるに於て孫もが孫もがわぬわぬとてうらま
實の孫もあらうとる者ともうつともと涙を流して懐びて涙をぬるるにれど

子の育ち由一の顔きよとて久松町は昔も湯屋と申すの由舟蔵めて
初まて成人志とてその産の程も悲涼しと涙を流し泣びるる思ひ
申すも作のとう産種の程もあきつ思と申すも多程あるが
泣と懐りなるとも家おを授けしやうの今我まらと申すもはるくは世の
養育しせりての状況と委しく申して申せられぬが思あつては始りて
若き心よらゆつしきと思ひと感へとも思ひ限りたり一久松町の母の云
事とおりにお知と妻よとらと涙は天降の男氣もあはれとては
あつるに去るるがうら心の不常うてお知とま婦と成ては昔も湯屋の
あつるも初も初らるるにが家は久松町一帯りせし由の思ひの礼
と申すも久松町の家可首の通り一家の血をまをとの一人幸ひ
家縁は尚年十五也一娘しとて昔はの娘もやうんとおはる
若昌院と申すもよろるの授授とておしやうと申すも今も始りては

と申す酒沼うじは若くつゝの誠とてお細う誠とてお入らぬと改ておら
とのれきりてち又おれまふくお細うとむりまじく子孫繁栄業は
振やとわらく欲ひまが不都合久ね町のねねを昔昔清方(行て修
の物知りとして昔昔清方お細う若氣の徳りよてお苗とぬておま
をして大志更し一程と捨てるふ者志と誓りし後五女もいふるれ
ども世な我子先んどのお苗のゆら一まふされ表向よりお子の名業
を昔のぬりよぬりさる振と修くの程よ二女も昔昔清方もいふの上
より育て上てるお細うがここのつゝお女房のむさう一なる子なり
しに程まゝお細うのつて娘と云ふ号もで波一立て身まくりしと改波是
と云け合原もきりぬ昔昔清方もお東業知して昔昔清方お入らぬく
まきりせつあつ流お明して不都合お入らぬく列合お入らぬく
別るお入らぬくお入らぬくお入らぬくお入らぬくお入らぬく

してお細うとお細うまゝ実を昔昔清方始て安曇を感へ入我より一自
てお細うのお細うをさうけしゆるを知らくゆらお入らぬく又昔昔清
も欲ひしり不都合も投投として安曇のつゝ孫娘の民を日招をぬく
昔昔清方お細う後入とまやつ家の欲ひの年なりしに昔昔清方お入らぬ
富へあゝふみく昔昔清方として是も日招をぬく表向お細う呼道
くお細うし不都合の系系も表向お細うお細う姉のお細う子あり
あゝお細うと主人とぬり下男のお細うと昔昔清方として系系のお細う
しお細うの上のお細う送りこし又系系のお細うも久ね町の昔昔清方
よりお細うし送り下しお細うをまふお細う下してお細うとぬく
し日くお細うしお細うお久ね町も表向お細うお細うと安曇
昔昔清方お細う三つお細うけてやり又昔昔清方の嫁とぬくお細うも
ぬくお細うもぬくお細うも別してぬくお細うも今昔昔

ゆきゆきと世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
年月とさるる固き世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
あるド級を思ふたうく致し世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
お氏とちよのこさる致せの中も集くと送るを内へ世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
玉の指する男子お生しある世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
三女と成く夫婦の志士の月と志しと乳母侍女とを育むる
又久松町の善治とちよのこさる致せの中も集くと送るを内へ世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
後とし善治と隠居して世の中の子の世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
次が子と世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
は中より未だ世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
が男世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
能く心ひ世に流るる夫婦の心算をかんたんに実をうくるよりよきゆき
多き者れ

江戸巻 大尾

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten characters in the top left corner, possibly a date or a reference number.

Handwritten characters in the bottom right corner, possibly a signature or a page number.

